

つ つ み、
ま も り、
つ な ぐ。

田倉 纒帯工業株式会社 100年

弾力包帯のパイオニアとして、 信頼される製品を創り続ける

田倉繻帯工業は、おかげさまで2026年に創業100周年を迎えることができました。
包帯をはじめとした医療材料の専門メーカーとして、「包む」という機能を追求し続け、
傷ついた人を「守る」、使う人に信頼される製品づくりに努めてまいりました。
このように長きにわたり事業を続けることができましたのも、
これまで弊社を見守り、支えていただいた皆様のおかげだと深く感謝しております。
そして、この大きな節目に、これまで皆様と共に歩んできた軌跡を周年誌として編纂し、
これからについて語り合いながら、次の世代に「つなぐ」ことを願っております。
今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

高尾山から見た八王子方面の眺望



The
100
YEARS

田倉繻帯工業株式会社
100周年誌制作委員会 代表
特別顧問

田倉 勉

100年のあゆみ

昭和元年から平成、令和の時代へと事業の襷をつないできた100年。
織物のまち、八王子で創業し独自の技術を開花させた田倉縲帯工業のあゆみは、
変わりゆく時代の中にあっても、変わらぬ「ものづくりの精神」を育んできました。

1926 ●初代・田倉仁三郎が神奈川県南多摩郡由井村大字館（現在の東京八王子市館町）にて織物業を始める
●昭和と改元

1930 ●八王子千人町で田倉織物工場を設立

1932 ●独特の織物技術にて男物着尺地が認められ数々の賞を受賞

1933 ●技術が松坂屋百貨店に認められ直属の取引先となる

1945 ●ポツダム宣言を受諾し終戦



織物工場
(昭和時代はじめ)
個人蔵(提供:八王子市郷土資料館)



旧本社 / 自宅兼工場 (昭和初期)

昭和元年～昭和20年

1926~1945

1950 ●朝鮮戦争勃発 (1953 休戦)

1951 ●有限会社倉之森工業を設立
ガーゼの製造を開始

1952 ●在日米軍調達庁より弾力包帯の製造依頼に対し、独自の技術開発で製品化に成功。
(我が国における伸縮性包帯の始まりと言われている)

1960 ●陸上自衛隊において弾力包帯の採用が決定
(仕様書の規格作成を行い、今日の弾力包帯製造技術の基盤となる)

1962 ●田倉縲帯工業株式会社を設立
●田倉仁 社長就任

1964 ●東京五輪開催



八王子空襲の焼け跡 (昭和20年)
八日町佐藤ビル(現スカイホテル)から西方向を望む
所蔵:八王子市郷土資料館

昭和21年～昭和40年

1946~1965

1970 ●大阪万博開催

1975 ●会社のロゴマーク制定



初期ダイヤカットエース

昭和41年～昭和60年

1966~1985

1979 ●ドイツ製の経編機を導入
伸縮包帯、ネット包帯製品など製造開始

1982 ●本社・配送センター
(現第2工場)を完成



1983 ●関連子会社 パアム株式会社を設立
(1986日本衛材株式会社に社名変更)



日本衛材株式会社

1985 ●ブラザ合意



ダイヤカットエース
1966～

チューブタイ
1967～

ダイヤサポート
1983～

ファーストグリップ
1983～

メディファー
1983～

1986 ●石川県にM&Aにより工場開設
(現 北陸工場)



1989 ●昭和天皇崩御し平成と改元

1992 ●東京工場新社屋完成
新設備稼動



昭和61年～平成17年

1986~2005



チュービストッキーネ
1986～



クラビクルベスト
1986～



ハイレッチタイ
1990～



ミケールポア
1990～



東京と北陸の社員交流(2006)

アームリーダー
1990～

1995 ●阪神・淡路大震災

1997 ●北陸工場に新社屋建設



2001 ●本社社屋購入 本社機能移転
(旧本社は配送センターに)



2002 ●サッカー W 杯が日韓共催で開催

2004 ●ISO9001 認証取得

●中越地震

2006 ●田倉 勉 社長就任

2007 ●北陸工場 拡大
●能登半島沖地震

2008 ●第三種医療機器製造販売業許可
医療機器製造業許可

●リーマンショック

2011 ●東日本大震災

2012 ●東京第3工場拡大

2017 ●東京工場改修・大型設備更新

2019 ●令和に改元

2020 ●田村駒株式会社のグループ
企業となる



●新型コロナ感染拡大

平成18年～令和8年

2006~2026

2023 ●北陸第2工場開設



2024 ●能登半島地震

●能登半島地震で北陸工場が被災



2025 ●資本金を6,000万円に増資

2026 ●創業100年

●北陸第3工場開設



ニースプリント
1991～

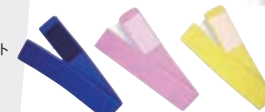


ニータックス
1995～



ホワイトコット
1995～

リキテックス
2005～



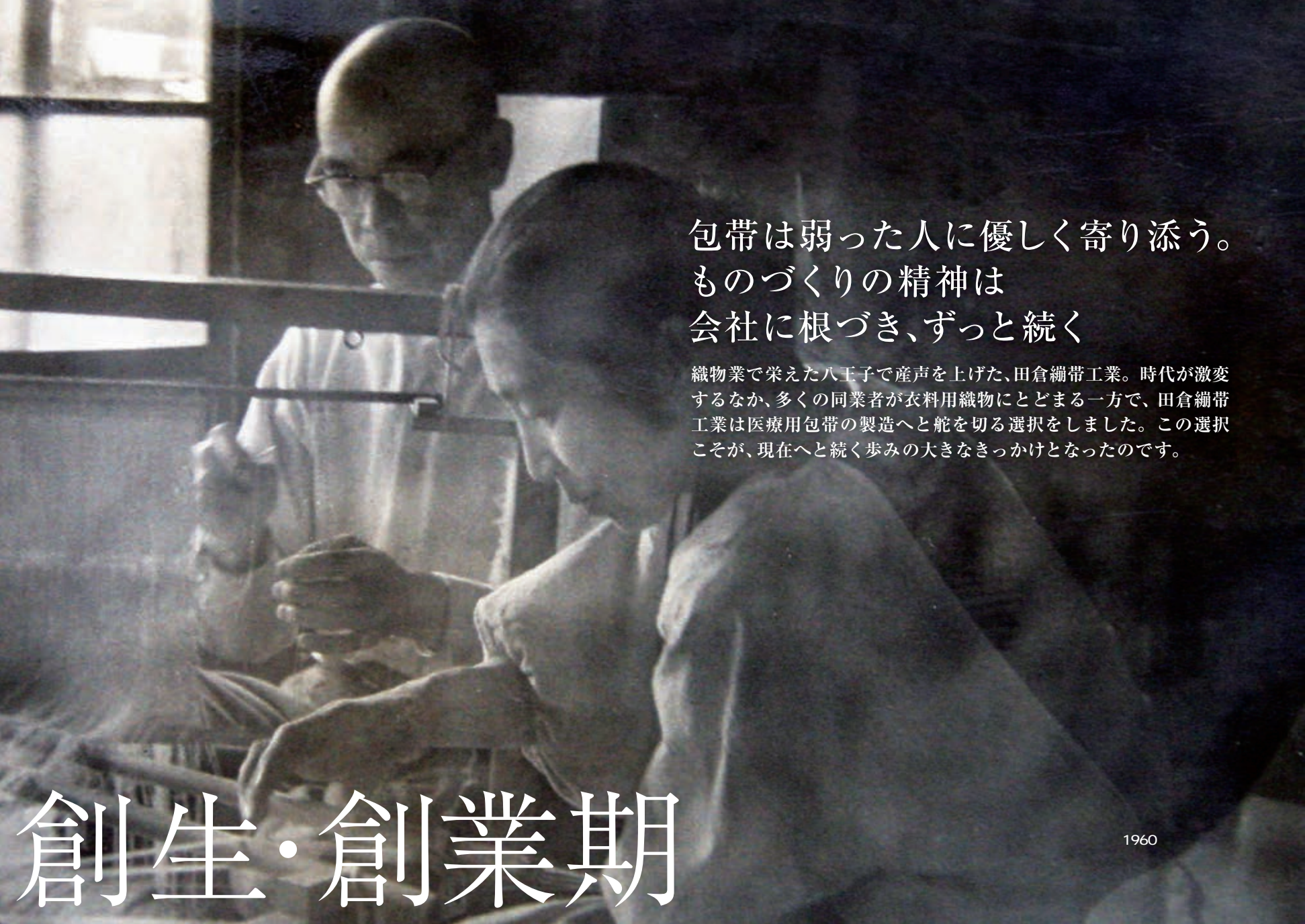
NEストラップ
2006～



NE クランプ
2007～



デュペレベルト
2012～



包帯は弱った人に優しく寄り添う。
ものづくりの精神は
会社に根づき、ずっと続く

織物業で栄えた八王子で産声を上げた、田倉繻帯工業。時代が激変するなか、多くの同業者が衣料用織物にとどまる一方で、田倉繻帯工業は医療用包帯の製造へと舵を切る選択をしました。この選択こそが、現在へと続く歩みの大きなきっかけとなったのです。

創生・創業期

1960年代前半の工場

1926年、創業者・田倉 仁三郎が八王子市館町にて織物業の準備を開始、苦難のすえ3年後に八王子市千人町にて織物工場を立ち上げたことから、田倉繻帯工業の歴史は始まります。仁三郎の織物の技術は高く評価され、松坂屋百貨店との取引も実現。1945年の終戦後、織物業界は衣料不足から「織れば売れる」空前の好景気に。しかし仁三郎は衣料ではなく医療用ガーゼを生産する道を選び、1951年に有限会社倉之森工業を設立。同社は朝鮮戦争を背景に米軍から伸縮する包帯の製造依頼を受けます。当時、伸び縮みするような包帯の製造技術は国内にはありません。日本では綿の布を裁断し包帯として使っていたのです。

仁三郎は日本のステテコにヒントを得て、強く撚った綿糸が引く力を吸収し、緩めれば戻るとい原理を応用して製品化に成功。「弾力包帯」と名付けました。この弾力包帯は、その後、誕生する伸縮包帯やネット包帯など独自開発による製品の第1号でした。続いて陸上自衛隊での採用も決定。この時、仁三郎が作成した仕様書と規格は、わが国における弾力包帯製造技術の基盤となっています。

1962年、2代目となる息子の田倉 仁が事業を受け継ぎ、田倉繻帯工業株式会社を設立。仁は自らの足で販路を開拓し、全国の衛生材料用品メーカーへOEMの提供を始めます。さらに「より使いやすい薄手の弾力包帯を提供したい」と開発にも着手。1979年には薄手の伸縮包帯の製造に適したラッセル機などの新設備を導入し、伸縮包帯・ネット包帯・サポーター・医療用のコルセット等の製造も開始。3年後には石川県に工場（現北陸工場）も開設。現在の東京・北陸の2拠点体制が完成したのです。



1960年代当時の包帯織機



最初の本社前にて初代仁三郎の妻（初江）と田倉 勉・勉の姉



北陸工場開設当時から稼働する経編「ラッセル機」

Column

田倉繻帯工業の名が日本中へ
知れ渡ってほしいという想い

これほど長く田倉繻帯工業が続けてこられたのは、お客様やお取引先の皆様、そして社員をはじめ多くの方々に支えていただいたからです。感謝の念に堪えません。私たちの扱う製品は、傷ついた人を守り癒す包帯です。だからこそ、使う人たちのために“優しさ”を吹き込むような想いで尽力してくれた社員の一人ひとりに、心より感謝しています。田倉の包帯が平和のシンボルである鳩の傷を守っているロゴマークにも、その想いは込められています。そして、いずれ傷を癒した鳩が羽ばたいていくように、田倉繻帯工業の名が日本中へ知れ渡ってほしいという願いが、100周年という大きな実りにつながったのだと実感しています。

田倉 仁

1935年八王子市生まれ。都立八王子工業高校（紡織科）を卒業後、家業を継ぎ弾力包帯製造に携わる。その後1962年に現在の田倉繻帯工業を設立。細幅織物・経編・丸編製の包帯と拡大。1983年には現在の日本衛材の基となる自社ブランド会社を設立。



成長・変革期



ロングセラーの商品を
守りながら、新たな展開へ。
医療の現場への想いを次の世代へ

創業者 田倉 仁三郎が開発した弾力包帯を軸に、2代目の田倉 仁はさらに包帯製品の開発を続け、OEM先1社に絞らず全国にある衛生材料メーカー各社に拡大。3代目となる田倉 勉への継承を契機に、田倉繻帯工業は繊維産業という概念を脱し、医療材料メーカーへと全社の意識を改革することに着手しました。

1990年前半にバブルが崩壊、日本経済は停滞の時代へと突入します。繊維産業も転換期を迎えていました。1994年、製薬会社に勤めていた田倉 仁の息子、勉（3代目）が田倉繻帯工業へ入社します。そして2006年、社長に就任した勉は生産現場の環境改善から製造工程の改革、業務の効率化に至るまで全社的な構造改革に着手。さらに2004年に取得したISO9001認証基準を社内ルールとし、より厳格な品質管理体制を整えます。そこには異物混入が許されない医療用品を扱う会社として、品質管理の徹底と体制強化を実現するという強い決意がありました。

また包帯以外の医療用品においても臨床現場のニーズを開き取り、開発・製品化することにも積極的に取り組みました。その第1号として誕生したのが、透析補助器具である止血クランプです。その後も、医療の現場からの多様な要望に応じ、各部の固定帯やサポーターなど製品は拡充、事業の幅は広がりました。元来、田倉繻帯工業の主力製品である弾力包帯やネット包帯も、相談をきっかけに開発した製品。お客様の声に真摯に向き合う姿勢は創業以来、一貫して受け継がれてきたものです。

2008年には第三種医療機器製造販売業許可・医療機器製造業許可を取得。お客様のより深いニーズにも応えられる体制が整いました。さらに2020年、勉は生活関連商社である田村駒株式会社のグループ企業の一員になるという決断を行います。田倉繻帯工業の独自の技術力と田村駒のネットワークを活かして、事業基盤を強固にする未来を選んだのです。田倉繻帯工業は100年の歳月を経て今、繊維産業から医療産業へと新たな一歩を踏み出しました。



1985年北陸工場 テープ織機



1995年当時の本社（現東京第2工場）にて勤務する田倉 勉



1997年新築時の北陸工場E棟

Column

経営が厳しい時期も、 祖父の弾力包帯への信頼が支えに

私が入社したのは、バブル崩壊直後のデフレ期でした。市場には安価な海外製品が流入し始め、従来の国内製造を中心とした経営スタイルに黄色信号が灯っていた時期でもあります。

そのような逆風の中、私は取引先各社へ当社の強みを訴求し続けました。私を支えたのは、自社の「弾力包帯」への絶対的な信頼です。祖父が開発し、今なお多くの医療現場で使用される欠かせないアイテムであるという事実は、私にとって大きな誇りでした。

何より、他社が真似できない高品質な製品を、国内自社工場で一貫生産していることこそが最大の強みです。徹底した品質管理に加え、OEMでありながら「小ロット・短納期」を実現している点も、国産製品を求めるお客様の信頼に繋がっていると確信しています。

田倉繻帯工業にとって、弾力包帯はまさに「原点」と言える存在なのです。

田倉 勉

1966年八王子市生まれ。日本大学を卒業後、外資系製薬会社にてMRを経験し1994年に田倉繻帯工業に入社。2006年に同社及びグループ会社の社長に就任。ISO、医療機器製造業許可、製造販売業許可など各種認証許可取得。2020年に田村駒グループへM & Aを果たす。



Hachioji



織物のまち、東京・八王子と
石川・金沢が出会い、
ものづくりの想いをつなげる

田倉繻帯工業の製品を支える東京工場と北陸工場には、どちらも歴史的に織物業が盛んという共通点があります。土地柄や地域性はそれぞれに個性はありますが、共通する“織物”への想いは、ひとつになっています。



Hokuriku

Hachioji Hokuriku

創業の地、八王子で。 戦火を免れ、100年続く

八王子は古くは桑の都と呼ばれ、古来より養蚕や織物が盛んでした。大正の終わり、兵役を終えて故郷に戻った仁三郎は5年間の織物修業を経て、この地で独立します。

戦争末期、隆盛を極めた八王子は空襲で市街地の80%が焼失。ところが、田倉繻帯工業の工場のある千人町は奇跡的に無傷でした。戦後「着物の需要は、いずれ減る」と医療用ガーゼの製造へと事業を方向転換した縁で、弾力包帯の開発に挑むことに。当時、開発に明け暮れる父のそばで、中学生だった仁も「父の喜ぶ姿が嬉しいから」と開発を手伝ったというエピソードもあります。

仁が社長就任後、ライオンズクラブやメリヤス協同組合、商工会議所に入会したことで、地元企業との交流は活発になります。さらに積極的な社会貢献活動や奉仕活動によって地域とのつながりも深まりました。バブル崩壊後、八王子の繊維産業の規模は一気に縮小しますが、八王子で100年にわたり培われてきた田倉繻帯工業の技術やものづくりの精神は、織物から医療へと領域は変えながらも、この地で今もなお受け継がれています。



織物タワー
所蔵：八王子市郷土資料館

機織り音で止まない、 活気あふれる八王子

戦後の高度経済成長期の八王子は、ガチャン、ガチャンとリズムカナル織機の音が早朝から夜遅くまでにぎやかでした。織物工場だけでなく糸屋・撚り屋・染屋・機械屋・買継商など織物に関連するあらゆる職業の人々が、まちの隆盛を支えていたのです。1995年に撤去されるまで、八王子駅前の織物タワーは、まさに織物産業の繁栄を象徴していました。

2024年の能登半島地震を乗り越えて、 確かな絆が見えてきた

石川県も織物の歴史は古く、加賀友禅に代表されるように、絹織物の技術は今日まで脈々と受け継がれています。田倉繻帯工業と北陸との出会いは、1970年代後半。ネット包帯の国際特許の開放を機に、田倉繻帯工業が製造に着手したことがきっかけでした。機械の調達・修繕・管理、働く人の技術力において、金沢は非常に恵まれた環境でした。当初は委託生産の形で、後に縁あって田倉繻帯工業の直営工場となったのが、現在の北陸工場。2拠点体制が整ったのです。

北陸工場で忘れられないのは、2024年1月1日に起きた能登半島地震。内灘地区は震度5弱、北陸工場も被災します。工場に急行した現場責任者は、「工場は建てなおせないかもしれない」と愕然としたといいます。しかし幸い東京からの支援物資がすぐ届き、お取引先の担当者も心配して次々と駆けつけ、3週間後には製造ラインが稼働。東京工場と北陸工場が心をひとつに工場再建に向き合い、新たな絆が育まれたのです。さらに現在、北陸に新たな工場が完成。自社一貫生産体制のさらなる強化に取り組んでいます。

被災時、社員の支えとなったお客様の言葉

能登半島地震による北陸工場の被災を知ったお客様から、復旧期間中、お見舞いの言葉や手紙が多く寄せられました。再開を目指し復旧作業に取り組む社員への感謝やねぎらいの言葉、生産再開を待ち望む激励の言葉など、多くの社員が勇気づけられました。



北陸従業員宛 感謝の寄せ書き





100年続くには理由がある

田倉繻帯工業のもっとも大きな特長であり強みでもあるのが、国内自社工場での一貫した生産体制です。

長年にわたり信頼を培ってきた“田倉繻帯工業”品質は、どのように支えられてきたのでしょうか。

製造、営業、品質管理、それぞれの部門責任者が語ります。



Interview < 製造編 >

長年培った技術と 新たな工場の拡充で、 揺るぎない 安定生産を実現

製造



橋本 孝雄
北陸工場 工場長

現在、北陸工場では弾力包帯（広巾織物）・伸縮包帯（経編、細巾織物）・ネット包帯（経編）、北陸第2工場ではストックネット（丸編）を製造しています。糸の加工から生地を作り、包帯に仕上げるまで多種多様な繊維機械を保有し、自社で一貫生産できることが最大の特徴です。各工程で糸や生地の品質を入念にチェックすることで、高品質な包帯の安定生産を実現しています。

包帯のように目の粗い生地の編織は簡単に思えて、実は衣類などの一般的な繊維製品の常識とは反対の調整が必要になるなど、難しい場合があります。工場では基本的に毎日同じ作業の繰り返しですが、その「当たり前」こそが田倉繻帯工業が長年培ってきた技術の積み重ねに支えられています。

また各設備のメンテナンスや更新により、安定した生産体制の維持に努めています。しかし、国内の繊維機械メーカー・古い機械を修理できる会社の減少、そして部品供給の課題など、年々設備の維持が困難になりつつあ



安定生産を支える、徹底した保守点検

ります。包帯ならではの難しさもあり、更新時の機械選定には、より慎重に取り組んでいます。

2024年元旦の能登半島地震以降、北陸工場は被災した建屋で生産を続けてきました。しかし2026年3月には新たに北陸第3工場が竣工。北陸工場では伸縮・ネット包帯、北陸第2工場ではストックネット、北陸第3工場では弾力包帯を製造する計画です。それぞれの工場で全国の医療現場に、より高品質な製品を安定して提供するために邁進します。



広巾織物「レピア織機」



経編「ラッセル機」



細巾織物「ニードル織機」



ストックネット「丸編機」

医療の現場に 寄り添い、 新たな領域の 製品開発にも挑戦



桑原 俊秀
営業推進部 統括部長

営業

田倉繻帯工業は、全国の衛生材料メーカー様へ製品を提供しています。徹底した品質管理と安定供給を第一に掲げ、日々製造に励んでいます。仕様書に沿った確かな製品を作り続けることは基本ですが、製造に専念するだけでは、医療現場の最新情報や潜在的なニーズを十分に汲み取ることができません。そこで、現場の声を捉え、より良い製品開発へ繋げることを目的に、1983年に日本衛材株式会社(設立時：パアム株式会社)を設立しました。現在は既存製品の改良に加え、止血クランプや透析中の抜管防止ホルダーなど、包帯以外の新たな領域にも積極的に挑戦しています。

こうした柔軟な試作・開発を支えているのが、自社工場による「一貫生産体制」です。例えば包帯の場合、糸の加工から製織・編み立て・仕上げ・包装まで多くの工程を要するため、一般的には工程ごとに外部へ委託する分業制がとられます。しかし分業制では、試作品の完成までに複数の企業を経由する必要があり、迅速な開発は困難です。弊社はすべての工程が自社内で完結するため、スピーディな対応が可能であり、それが徹底した品質管理と安定供給にも繋がっています。

また、小ロットから提供できる点も弊社の強みです。必要な数量を短期間でお届けできる体制を整えています。納品まで数ヵ月を要することもある海外製品と比較し、現場のニーズに即座に応えられる機動力に、大きな

信頼をいただいております。

主力製品である弾力包帯は、その優れた圧迫力と治療効果により、長年多くの医療機関で採用されてきました。しかし近年、基礎看護教育のカリキュラム改定などの影響もあり、臨床現場からは「包帯法に自信がない」「できるだけ包帯を使用したくない」といった声が聞かれるようになりました。本来、弾力包帯は正しい知識と技術を持って使用すれば、血栓予防や圧迫療法などで優れた効果を発揮する極めて重要なアイテムです。そこで私たちが取り組んでいるのが、包帯圧迫療法の啓発活動です。包帯法の技術と知識を持つ看護師の方のご協力を得て、手技を学べる動画を制作。教育機関・医療施設での研修にお役立ていただけるようウェブサイトで公開し技術の普及に努めています。常に医療現場に寄り添い、ニーズをいち早く捉えて具現化する。これこそが、創業当時から変わらない田倉繻帯工業の姿勢です。



不意の抜管を未然に防ぐ
「透析中の抜管・抜針防止ホルダー」



迅速かつ確実な止血を支援
「止血クランプ」

Interview < 管理編 >

同じミスは
繰り返さない。
その決意が、高い
品質と技術を実現

管理



内門 瑞恵
品質管理責任者



信頼される品質のために、各工程で目視検査を実施

不良率を10万分の1に抑えるために、私たちは徹底した品質管理を行っています。目視による全量検査は、製造工程内の包帯生地の上プレス乾燥時、裁断時、巻き取り時、包装機投入前後の4～5回行い、汚れや織りキズ、異物などを入念にチェックします。さらに金属検出器による検査も合わせて実施しています。

最終段階の全数目視検査を行う複数の専任担当者は、そのいずれもがわずかに数秒のうちに汚れやキズを見極める高度な判別力を持っています。最終検査には非常に高い集中力が必要となるため、専任担当で時間を分担し、検査品質を維持しています。

また工場働く社員一人ひとりが厳しい品質基準をもち、高い意識で取り組んでいます。中には、たとえ社内の品質基準を満たしていても、自らの責任において不採

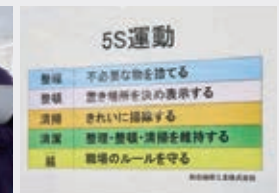
用と判断する社員もいます。なぜそこまで厳しくするのかと話を聞くと「過去に類似のクレームをいただいたことがある。同じミスは二度としたくない」「基準値内の小さなキズでも、実際に使用される方に不快感を与えないから」などの答えが返ってきました。

過去のご指摘を二度と繰り返さないという姿勢と、医療の現場で実際に包帯を手取る方々に、気持ちよく使っていただきたいという想いが、結果として一人ひとりの技術向上につながっているのかもしれない。

現場には長年経験を積んだ熟練の社員が多く在籍しています。中には70歳を越える社員もいますが、技術力は社内でもトップクラスです。各自の得意分野に合わせて能力を発揮できるよう、ISO9001のスキルマップ(力量管理表)も活用しています。個性はそれぞれですが全員に共通しているのは、世の中に役立つ素晴らしい製品づくりに携わっているという“誇り”です。その揺るぎのない誇りが、常に高い品質を守る原動力になっています。



現場との対話が改善を生む



工場内の規範を示した掲示物



田倉 勉
特別顧問

小泉 敦史
常務取締役
営業本部長

向井 崇
代表取締役社長

桑原 俊秀
取締役
営業推進部 統括部長

次の100年に向けて

変わらぬ価値を 守るために、 変わり続ける

私たちは一貫して、徹底した品質管理と安定供給を追及してきました。また、主力製品である弾力包帯の製造技術は、誕生から70年以上、同様の仕様・規格で製造し続けています。この“変わらぬ価値”を守り続けるために、時代や環境の変化に合わせて“変わり続ける”ことが重要であると考えます。

そのために注力すべきは、生産工場の盤石化。2026年に完成した北陸新工場では、弾力包帯の原材料から最終製品の仕上げまでを一貫して行う

製造ラインの確立に取り組んでいます。完成すれば日本で唯一、世界でも有数の医療包帯生産工場になると自負しています。製造拠点である北陸・東京工場の体制強化こそが新たな100年の基盤となるでしょう。

田村駒グループの一員となり、第二の創業期ともいえる変革の時を迎えています。QC活動の基盤となる環境も整え、グループ間の取り組みも始まろうとしています。今後、求められるのは、社員一人ひとりが主体的に自己研鑽しながら刺激し合

い、新たな価値を生み出すこと。個の力の結集こそが、新生田倉繻帯工業の原動力です。挑戦できる領域は確実に拡大しています。その可能性は、未知数です。これからお客様、取引先の皆様へ貢献し続ける企業として、邁進してまいります。

田倉繻帯工業株式会社
代表取締役社長 向井 崇
常務取締役 小泉 敦史
取締役 桑原 俊秀

会社概要

社名	田倉繻帯工業株式会社
創業	1926年(昭和元年) 田倉 仁三郎が神奈川県南多摩郡由井村大字館 (現在の東京都八王子市館町)にて織物工場を始める
設立	1962年(昭和37年)9月10日
資本金	6,000万円
代表者	向井 崇
従業員数	63名(2026年3月現在)
所在地	【本社】東京都八王子市千人町三丁目17番10号 【東京工場】東京都八王子市千人町三丁目15番4号 【東京第2工場】東京都八王子市千人町三丁目16番6号 【東京第3工場】東京都八王子市千人町三丁目15番10号 【北陸工場】石川県河北郡内灘町字宮坂八-14番地 【北陸第2工場】石川県河北郡内灘町字向粟崎5-243 【北陸第3工場】石川県河北郡津幡町字大坪ろ1-6
グループ会社	田村駒株式会社(親会社) 日本衛材株式会社(関連会社)
取引先 認証・許可	衛生材料メーカー / 医療品メーカー / スポーツメーカー 他 ISO9001:2015 認証 第三種医療機器製造販売業許可 医療機器製造業許可
所属団体	日本衛生材料工業連合会、全国衛生材料工業会 東部衛生材料協同組合、八王子商工会議所



北陸第3工場 <新設>



本社

東京工場

東京第2工場

東京第3工場



100周年に寄せて

田村駒株式会社
代表取締役社長

堀 清人

このたびは、創業100周年誠にありがとうございます。

弾力包帯製造のパイオニアとして、医療材料の分野で信頼されるものづくりを長年にわたり続けてこられましたことに深く敬意を表します。

また、2020年2月より田村駒グループの一員として、

成長と発展されている田倉繻帯工業と共に歩んでこられたことを誇りに思います。

田村駒のミッションは「我々は人と人を繋ぎ、モノづくりを通じて新たな価値を創造し、快適で持続可能な社会の実現を目指します。」です。

田村駒グループ全体のさらなる進展に向け、

田倉繻帯工業がこれまで培ってこられた技術と創意工夫の精神を礎として、

この100周年を節目に新たな領域を切り拓いていくものと信じております。

次の10年、20年、150周年に向けて、

共に一丸となって快適で持続可能な社会の実現に

貢献していくことを心より願っております。

The
100
YEARS

つつみ、まもり、つなぐ。

田倉繻帯工業株式会社100年

2026年6月発行

発行／田倉繻帯工業株式会社

〒193-0835 東京都八王子市千人町3-17-10

編纂／100周年誌制作委員会

